

第19回 日能研

文学コンクール

優秀賞

【論説文】「きれいごと」を捨てる

学習院女子高等科・二年

清水 美結さん

作品に対する思い・感想

この度は優秀賞という素敵な賞を受賞することができ、大変嬉しく思います。

私は、話題になることも多い「多様性」に着目し、きれいごとではなく、真に世界がつながるためには多様性とどのように向き合ふべきなのか、考えました。私の作品を読んだ方が、自身の本心と向き合って、今一度多様性について考え直すきっかけとなれば嬉しいです。

ありがとうございました。

「きれいごと」を捨てる

清水 美結

最近よく、「多様性」という言葉を耳にする。ネットでもニュースでも、あらゆる場面でこの言葉が叫ばれ、「多様性を尊重する社会」など、とうに聞き慣れたフレーズとなっている。現代社会にはこの「多様性を尊重する社会」を目指そうという風潮があり、これは既に世界的な目標となっている。しかし私は、この風潮に疑問を感じる。私は、皆が「多様性を尊重する社会を目指そう」と外面的には一方向を向いているようだが、それは見せかけで、実際には本気でそう思う人とそうは思えない人の間で分断が生じているように思うのだ。ただ私は、この風潮を否定しようとするわけではない。この地球には80億を超える人が生きていて、そこにいろいろな人がいるのは当たり前で、むしろ皆が同じ見た目や考え方、価値観を持っている方が気味の悪い話だ。だからこそ、やたらと皆が多様性、多様性と叫ぶ今の世の中は気味が悪く思えてしまう。そこで私は「多様性」をテーマに、世界が意識や考え方において真に「つながる」とはどういうことなのか考えた。

1年ほど前、私は池袋でロリータファッションをした中年男性を見かけた。ショート丈の、フリルがたくさん付いた服を着て、髪にはたくさんのピンやリボンをつけ、またフリルのたくさん付いたバッグを持って、その人は歩いていた。私は困惑し、咄嗟に「受け入れられない」と思った。私はここで「思ってしまった」という言葉は使わない。なぜなら、それは罪悪感などと同時に生じた気持ちではなく、それが私の本音だったからだ。これは悪いこと、許されないことなのだろうか。例えばこの経験と私の気持ちをネット上に書き込んだりしたら、今の社会では間違いなく批判されるだろう。その書き込みで誰かが傷ついたならば、それは確かに「悪いこと」になるからだ、私も分かっている。しかし、そもそもその批判自体、果たして本心からのものなのだろうか。当事者の考えや価値観を真に理解した上でのものなのか。もちろんその上での擁護という意味の批判も存在するだろうが、一方で建前や見せかけの正義、「きれいごと」を語っているだけの人も少なからずいるのではないだろうか。私は、そうした浅はかな気持ちで、世の中の風潮に合わせて簡単に多様性という言葉を連呼している人が多くいるような気がしてならない。あるいは、本音が違う人もそれを抑えて建前を使っているような現代社会は、この話題に関して、本音を言うこと自体がタブーのように思っていると思う。こんな状態では、世界が「つながる」など到底無理なことだ。

思ってしまうこと、感じてしまうことは、仕方がないことだ。咄嗟に自分の心に湧き上がる本音は誰にも抑えることが出来ないし、偽ることも出来ない。自分が持っている考え方や価値観も、簡単に変えられるものではないだろう。しかしそこできれいごとを並べ、「きれいな」社会を作ろうとしているのが、今の私たちなのではないだろうか。それはあまりにも理想に囚われすぎなのではないか。そんなに私たちは皆きれいではないと、私は思う。むしろそこで自分が思ってもいない偽りの擁護を口にして、きれいであろうとすることは、自己中心的であり、相手に失礼なことだ。偽りの擁護は同情であり、それは何の

意味も成さないどころか却って相手を傷つけてしまうだろう。本心からの意見は純粋な本音だが、そうでない、自分を押し殺して周りに合わせるだけの意見はただの「きれいごと」だ。きれいごとを述べるのが正しいことであるとは限らない。

ある1つの意見があったとき、その意見にこの世の皆が賛成することなどまず有り得ない。反対派もいて当たり前だ。そうして意見が分かれたときに、「きれいなもの」に取り憑かれ、賛成派こそ正しいとして反対派をひたすら排除しようとするのはおかしい。多様性という話題に関して、そうなりつつあるのが今の社会だと私は思う。どんなにセンシティブな話題であっても、反対派の意見も含めて初めて、「多様性」が生まれる。それを受け入れられず、話題によれば皆で一方向を向くことが求められ、本音を言うことさえタブーとされてしまうようでは、到底「多様性を尊重する社会」などというものには辿り着けないだろう。

私は、自分が思ったことや感じたことをそのまま口に出来ないことがおかしいと言っているわけではない。自分の思っていることが今の社会の風潮と異なるからといって、本音を曲げてまで、どんな多様性も認め合おうとする社会に同調している人がいるということに疑問を覚えたのだ。世界が「つながる」ということは、皆が一方向を向いているということではない。皆で「輪になる」ということだ。「輪になる」ためには、互いに向き合わなければならない。輪になったとき、自分と同じような方向を向いている人もいれば、自分とは反対の方向を向いている人もいるだろう。人それぞれ価値観は異なるのだから、向いている方向が違うのも当然だ。そこで大切なのは、目の前にある多様性をしっかり見てあげることだ。今の社会は互いの多様性を見ているようで、見ていない。ただ「受け入れる」ことだけが正義かのようにになっている。「受け入れる」「受け入れない」の多様性を消しているのだ。しかし、自分でしっかり見て向き合った上で、その多様性が受け入れられないと思うなら、無理に受け入れる必要はないと思う。それが本音で、その本音を自分で殺す必要もないと思う。

私はこの世の中が、皆が本音を言い合うものになるとか、ましてやそう変わって欲しいなどとは思っていない。今の世の中は、物事を穏便に収めるための建前で溢れかえっている。それは争いを避けるためには仕方のないことで、これからも人々は本音と建前を上手に使い、そうして世の中が作られていくことだろう。それでも私は、建前だらけの現状を見て、とてつもない違和感を覚えてしまったのだ。必ずしも「世界が『つながる』」＝「受け入れる」ということではないはずだ。受け入れるかどうかは関係なく、多様性と向き合い、自分とは異なる価値観の存在を認め合うことが最も重要で、それが世界が「つながる」ということなのではないだろうか。